

## 〈第六回 JICA 海外移住「論文」および「エッセイ・評論」論文部門 最優秀賞〉

## 秋深し五七五交わす加奈陀かな

## — 戦前カナダにおける日系人俳句コミュニティの社会学的考察 —

天野 剛至（常葉大学・教員）

## 〈目次〉

はじめに— 問題の所在、研究の目的・意義

1. 理論的枠組み
2. BC 州における日系コミュニティの成立と俳句活動
  - 2.1. 林業・製材業・パルプ製造業
  - 2.2. 農業
  - 2.3. 都市部（商業、メディア、金融業など）
  - 2.4. 水産業
  - 2.5. まとめ— 俳句活動の地域性と共通性
3. バンクーバー「あじろ会」と社会文化的地位の再生産
4. 本国俳誌投稿にみる象徴的帰属と文化的洗練の承認  
おわりに

キーワード：日系カナダ人、俳句、集合意識、社会文化的地位、文化的洗練

## 凡例

- ・本稿では、法的地位や世代差の相違を踏まえつつも、分析上の目的に照らし、カナダ市民権を有さない「在カナダ日本人」（主に一世）およびカナダ市民権を有する「日系カナダ人」（市民権を取得した一世、ならびに二世以降）を総称して、「日系移民」または「日系人」と呼称する。また、必要に応じて、「日系社会」、「日系コミュニティ」などの表現を用いる。
- ・本文中の表記は、新字体・現代仮名遣いに統一する。ただし、引用部分については、原資料の字体に従う。
- ・本稿では、原則俳号を（ ）に入れて表記する。ただし、引用時や俳句作品において作者を示す場合には、（ ）を省略する。

## はじめに— 問題の所在、研究の目的・意義

明治中期以降、日本人が移り住んだハワイ、アメリカ合衆国（以下、米国）、カナダ、ブラジル、ペルー、アルゼンチンなどの移民地では、俳句愛好者たちによって俳句吟社が組織され、頻繁に句会が催された。句会是对面形式に限らず、現地で発行された邦字新聞俳壇への投稿を通じても行われ、こうした活動の中で無数の俳句が詠まれていった。保存・記録された俳句の一部は、今日では移民の苦難や心情を物語るナラティブとして研究対象となり、それぞれの移民地ごとに調査・分析が積み重ねられてきた。

移民地における短詩型文学の研究は、大きく二つの類型に分類することができる。第一の類型は、移民地における文学的営為そのものに着目し、特定の俳人や俳句吟社の活動・作品、あるいは俳句の現地化や発展を分析するものである。具体例としては、米国における下山逸蒼<sup>(1)</sup>や直原敏平<sup>(2)</sup>、レニア吟社<sup>(3)</sup>に関する論考・評伝（糸井, 2005, 2012, 2015; 古川, 2023）、カナダのスコット沼瀧女<sup>(4)</sup>に関する論考（山田, 2008; 坂本, 2019）、ブラジルの佐藤念腹<sup>(5)</sup>や増田恆河<sup>(6)</sup>に関する論考・評伝（蒲原, 2020; 白石 (2021a, 2021b, 2022)）などが挙げられる。一方、俳句の現地化や発展に関する研究では、特に季語に焦点を当てたものが多い。日本とは気候が大きく異なるハワイやブラジルでは、独自の季語が生まれ、オリジナルの歳時記が編纂されており、これらに関する研究も活発である（東・藤原, 2012; クラウリー, 2012, 藤原, 2012; 白石, 2021b; 久富木原, 2024）。また、ブラジルでは、俳句が増田恆河の功績により三行詩「ハイカイ (haikai)」<sup>(7)</sup>として定着し、ポルトガル語による短詩の創作・発展に大きく寄与したが、これに関する研究も数多く存在する（スエナガ, 2018; 久富木原, 2020; 白石, 2021a, 2022）。

第二の類型は、移民の定住地における歴史的経験と結びつけながら、俳句を文化史的・社会史的に分析するものである。第二次世界大戦中、米国やカナダでは日系人が各地に設けられた戦時転住センター・抑留所・収容所<sup>(8)</sup>に送られたが、そこでも俳句活動が活発に行われた。ガリ版刷りの句集が編まれ、極限状況下でも言葉による表現の営みが続けられたのである。この点に関する研究として、米国におけるフォートミズーラ<sup>(9)</sup>をはじめとする複数の抑留所での俳句活動を考察した研究（糸井, 2011）や、カナダにおけるタシメ<sup>(10)</sup>ほか複数の収容所で編集された句集の分析（Pearce and Antonio, 2020; 天野ほか, 2025; Antonio et al., 2025）が挙げられる。これらは、強制収容所で詠まれた俳句を北米日系社会の文化史的観点から考察したものである。また、この類型にはジェンダーや階級などの社会学的視座を取り入れた分析も含まれる。例えば、写真花嫁や呼び寄せ花嫁として海を渡った女性たちは、理想とはかけ離れた現実に直面し、波乱に満ちた人生を送ることとなった。彼女たちの心情を映し出す俳句は、移民女性の経験を読み解く貴重な資料である。このような視点を反映した研究には、日系女性が詠んだ俳句を含む短詩型文学をジェンダーの視点から分析した論考（高木（北山）, 2009）がある。俳句という文学形式を通じて、移民たちは自身の置かれた社会的状況を風刺的に詠み、言葉の力で現実的困難を乗り越え、自己のアイデンティティを再発見・再構築しようとしたのである。

本研究は、こうした従来の二類型的な理解とは異なるアプローチから日系移民の俳句活動を捉え直す試みである。具体的には、俳句作品そのものではなく、俳句活動および俳句コミュニティの機能に着目し、「集合意識」と「権力」という社会学的視座から分析を行う。とりわけ、第二次世界大戦前のカナダ・ブリティッシュコロンビア（以下、BC）州各地において展開された日系移民の俳句吟社とその活動を主たる対象とする。本研究の構成は、以下の通りである。まず、カナダの日系移民の俳句活動および俳句吟社を論じるにあたり、援用する社会学的理論を挙げ、理論的枠組みを提示する。次に、BC州における日系コミュニティの成立過程と地理的展開を概観し、異なる職業的背景をもつ集住地ごとに組織された俳句吟社を紹介した上で、俳句活動が集団意識の形成に資する媒介として機能していたことを検討する。さらに、バンクーバーに存在した「あじろ会」および邦字新聞俳壇に焦点を当て、俳句活動が単なる文学的営為にとどまらず、エスニック共同体内における社会文化的地位の構築に果たす役割を明らかにする。また、一部の俳句愛好者が祖国・日本の俳誌に投稿していた事例を取り上げ、その社会的意味を考察する。本研究は、カナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社の文化的・社会的役割とそのダイナミズムを明らかにすることを通じて、日系移民の文化的営為に関する新たな知見を提供するものとなる。

## 1. 理論的枠組み

本研究は、第二次世界大戦前のカナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社を、単なる文学的営為としてではなく、社会的・文化的実践として捉える。そのための理論的枠組みとして、本稿では主に以下の三つの視座——①集合的儀礼としての文化実践、②文化資本と社会的ヒエラルキーの再生産、③メディアを通じた共同体の想像と権力作用——を採用する。

第一に取り上げるのは、デュルケーム (É. Durkheim) の提唱した「集合意識 (仏: conscience collective; 英: collective conscience)」の概念である。デュルケームは、社会を単なる個人の集まりではなく、個々人を超えた「集合意識」によって統合される実体であると前提づけた。その上で彼は、宗教的儀式や祝祭がこの集合意識を強化し、集団の一体感やアイデンティティの形成に資する点を論じている (デュルケーム, 1975 [=1912])。この視点から見ると、日系移民の俳句吟社における定期的な句会——多くの場合月例で開催された——は、集合意識を再生産する「儀式 (ritual)」と解釈できる。俳句吟社には一種の秘密結社的な性格も見出される。例えば、句会の参加者同士が「俳号」と呼ばれる互いに通じる別名で呼び合う慣習や、吟行・選句・批評といった定型の手順の共有は独自の象徴体系を形成し、吟社を単なる文芸愛好者の集まりを超えた「準宗教的」共同体の空間として特徴づけている<sup>(11)</sup>。このような象徴的構造を補強する理論として、ミード (G. H. Mead) およびブルーマー (H. Blumer) による象徴的相互作用論 (symbolic interactionism) を挙げることができる。この理論は、社会的行為が言語や記号などの「象徴」を介して相互構築されることを強調する (ミード, 1973 [=1934]; ブルーマー, 1991 [=1969])。句会における詠作・選句・批評といったやり取りは、象徴的相互作用の過程を通じて社会的紐帯を形成する活動であり、俳句が単なる個人的創作にとどまらず、コミュニティ形成と維持における中核的な媒体として機能していたことを示している<sup>(12)</sup>。

次に、ブルデュー (P. Bourdieu) の「文化資本 (仏: le capital culturel; 英: cultural capital)」の理論は、俳句活動を日系社会内部の文化的ヒエラルキー形成と再生産の装置として捉える視点を提供する。ブルデューは、文化資本を「客体化された形態 (objectified state)」、「制度化された形態 (institutionalized state)」、「身体化された形態 (embodied state)」の三種に分類し、それぞれが社会階級の再生産に寄与することを論じた (ブルデュー, 1990 [=1979])。なかでも「身体化された文化資本」は、言語、身振り、趣味、教養といった、無意識のうちに内面化される行動様式を指し、日系俳人たちが体現した俳句作法や美的感性に深く関係している<sup>(13)</sup>。さらに、ブルデューの「ハビトゥス (habitus)」(内面化された習慣や価値観) の概念を通じて、俳句活動が日系コミュニティにおける思考様式や行動パターンの同質性を生み出す構造としても理解できる。吟社を通じて共有された審美基準やふるまいの様式は、文化的権威の源泉となり、象徴的秩序の維持に寄与したと考えられる。この文脈において、エリアス (N. Elias) の「洗練 (refinement)」も参照されるべき概念である。エリアスは、近代社会における礼儀作法や羞恥心の内面化を通じて、「洗練された振る舞い」が社会的差異を象徴する過程を分析した (エリアス, 1969 [=1939])。本研究では、俳句という実践が日系移民コミュニティ内において社会的優位性を象徴する文化的装置として機能し、文化的エリート性を構築する手段となっていた可能性を検討する。

最後に、俳句活動におけるメディア的側面と権力作用を分析するために、グラムシ (A. Gramsci) の「ヘゲモニー (hegemony)」概念とアンダーソン (B. Anderson) の「想像の共同体 (imagined communities)」の理論を援用する。グラムシは支配階級がその地位を正当化・持続するためには、物理的・経済力強制力のみならず、文化的リーダーシップを通じて被支配層の「同意 (consent)」を獲得する必要があると論じた (グラムシ, 1978 [=1977])。邦字新聞の俳壇や吟社活動を通じて形成され

る「常識 (common sense)」や文化的規範が、日系社会内における階層的秩序の再生産に果たした役割を分析する際、この理論的視点は有用である<sup>(14)</sup>。一方、アンダーソンは国民という共同体は、新聞や印刷メディアを通じた共通の時間・物語の「想像」によって構築されると論じた (アンダーソン, 1987 [=1983])。この枠組みに照らすならば、BC 州内に点在する日系移民の俳句愛好者たちが邦字新聞の俳壇を通じて相互に作品を共有する行為は、地理的距離を超えて一体感や帰属意識を醸成する「想像の吟社共同体」の形成につながっていたと考えられる。

本稿で援用する諸理論は、必ずしも同一の社会像を前提としていない。デュルケーム的視点が俳句活動の統合的機能を強調する一方で、ブルデューやグラムシの理論は、その内部に潜む差異化や権力作用を可視化するものである。これらの理論を併置的に援用することで、本研究はカナダにおける日系移民の俳句活動および俳句吟社を、「社会的空間の再編成」、「象徴秩序の構築」、「共同体的想像と規範の再生産」といった社会的営為として分析する。もっとも、これらはいずれも近代西洋社会を理論的背景として形成された概念であり、移民、人種化、植民地主義の周縁といったディアスポラの要因を十分に理論化してきたとは言いがたい。本研究の分析的枠組みは、こうした多層的な次元において、俳句という文化実践が戦前日系移民社会における社会的秩序と文化的ヒエラルキーの再生産にどのように貢献したのかを明らかにするとともに、既存理論の射程と限界を同時に照射する試みでもある。

## 2. BC 州における日系コミュニティの成立と俳句活動

1880 年代後半に日本からカナダへの継続的な移民が始まってから 1941 年 12 月の真珠湾攻撃に至るまでの間、BC 州各地にはいくつもの日系コミュニティが形成され、地理的にも広がりを見せていった。これらの集住地の多くは、特定の産業への従事を基盤とした、いわゆる「産業集落」としての性格を帯びていた。表 1 は、1920 年代から 1930 年代にかけて BC 州内に点在した日系コミュニティを主な産業および地域区分に基づいて整理したものである。当時、日系移民が主に従事していた産業は、おおよそ以下の六領域に分類される——①林業・製材業・パルプ製造業、②水産業、③農業、④鉱業、⑤鉄道敷設・保守、⑥都市部での就労 (商業、造園業、メディア、金融業など)。また、表 2 は、邦字新聞『大陸日報』に 1920 年代後半から 30 年代にかけて頻繁に掲載された句会の報告記事をもとに、各地の俳句吟社とその主要メンバーを一覧化したものである。本節では、こうした産業別に形成された日系コミュニティで営まれた俳句活動の実態を、林業・製材業・パルプ製造業、農業、都市部に分けて概観する。

表 1 BC 州内主要産業別日系コミュニティ (1920-30 年代)

産 業	地 名 [日系労働者人口]	
	地 域	
林業・製材業	バンクーバー近郊	*バンクーバー [1,000+]、ポートコキットラム [86]、ロッシュポイント (現ノースバンクーバー)
	フレイザーバレー	アボッツフォード [30]、*フレイザーミルズ [100]、ポートハモンド (現メープルリッジ)、ポートムーディー
	バンクーバー島	シュメイナス [60]、ファニーベイ、*ポートアルバーニ、*ロイストン [60]、ユニオンベイ [40]
	ガブリオラ島	サウスガブリオラ
パルプ製造業	中部沿岸部	*オーシャンフォールズ [300]、*ウッドファイバー [150]
	バンクーバー島	ポートアリス [80]

水産業	南西部	スティーブストーン (現リッチモンド) [600]
	北部沿岸部	プリンスルパート
	バンクーバー島	ナナイモ、ユキュレット
農業	バンクーバー近郊	バーナビー、ニューウエストミンスター、リッチモンド、サリバン (現サレー)
	フレーザーバレー	アボッツフォード [56]、バーキトラム、チリワック、ミッション、ポートハモンド (現メープルリッジ)、ヘイニー (現メープルリッジ) [80]、ホノック (現メープルリッジ)
	オカナガンバレー	ケローナ [200]、* オカナガンセンター (現レイクカントリー) [50]、サマーランド [40]、バーノン [80]
	バンクーバー島	コートニー [50]
	ペンダー島	ホープベイ [20]
鉱業	バンクーバー島	* カンバーランド [100]、ナナイモ
	クイーンシャーロット諸島 (現ハイダグアイ)	イケダベイ (現イケダコープ)
商業・サービス業	バンクーバー近郊	* バンクーバー
	バンクーバー島	* ビクトリア

日系労働者人口は、1926年発行『加奈陀在留邦人々名録』の「在留邦人所在地案内」(pp.175-188)による。日系労働者人口の数字がないのは不明。「数十」とあったのは一律40とした。

\*俳句吟社の存在が確認できるコミュニティ

表2 BC州俳句吟社 (1920-30年代を中心に)

産 業	地 名	俳句吟社(活動時期)	主要メンバー (俳号)
林業・製材業	フレーザーミルズ	へちま会 (1928 ごろ)、河畔句会 (1932 ごろ)	芳賀輝治 (黙堂 / 翠潮)、(皮骨)、(梅蔭)、(一曲)、(濁流)、(十穂)、(狂絃)、(酒仙)、(掬泉)、(的々)、(晩成)、(汲花)、(初子)、(久米仙)、畠山栄太郎 (仙北)
	ポートアルバーニ	かもめ会 (1935 ごろ)	竹田寅雄 (孤村)、竹田だい (露野)、(みどり)、(一谷)、(滴水)、(若水)、(翠柳)、(抱栄)、(三千代)
	ポートムーディ	ひさご会 (1932 ごろ)	(聳山)、竹田寅雄 (孤村)、(三岳)、(芳生)、(桃村)、大村 (芳野)
	ロイストン	双葉会 * (1932 ごろ)	港 (巷水)、藤井 (清泉)、(栄山)、(水泡)、(佳月)、(爲直)、(洛水)、(松風)、(一石)、(蘇山)
パルプ製造業	オーシャンフォールズ	早苗会 (1932 ごろ)	(北鴻)、(幸春)、(北浪)、(茶的)、(於村)、(自然)、井上貞蔵 (三竿井)、(太郎平)、(三九)、(悦子)、(一夢)、(青萍)、高木 (司月齋)
	ウッドファイバー	すみれ会 (1932 ~ 1936 ごろ)	中野勝見 (梅節)、(秋聲)、島田 (玉星)、(梅月)、(豊波)、(春風)、(白雨)、吉川 (梅川)
農業	オカナガンセンター (現レイクカントリー)	青葉会 (1922 ~ 1967 ごろ)	小林伝兵衛 (芳翠)、引地とめ (若子)、伊藤珍太、沢鉄治郎 (喜柿 / 蝸牛)、小林ひろ (葉子)、太地豊吉 (峰月)、太地恵以 (恵)、小林幾江 (みどり)、千葉善七 (孤月 / 孤舟)、竹中清松 (竹嵐)、宍戸英次郎 (春雨)、(砂美)、(仙北)、(仙友)、(洞貝)、(涯山)、(竹堂)、(松葉)、(吐月)、(凹坊)、(あやめ)、(眺湖)、(芳眠)、(冬閑坊)
鉱業	カンバーランド	双葉会 *	ロイストン参照。
商業	バンクーバー	あじろ会 (1926 ~ 1932 ごろ)	中澤義雄 (笛水)、宇都宮鹿之助 (孤鹿 / 一瀉風)、三宅隆吉 (春江)、岩崎興理喜 (柿花)、鈴木悦 (みをつくし)、田村 [鈴木] 俊子 (鳥の子)、山本倫由 (暁花)
		木の芽会 (1928 ~ 1930 ごろ)	あじろ会と同じ (中澤・三宅を除く)
	ビクトリア	うき草会 (1937 ~ 1941)	スコットすゞ (沼蘋女)、スコットベティ (別天女)、甲山きよ (小百合)、(かなめ)、(さつき)、(弥生)

\*ロイストンとカンバーランドは、バンクーバー島東岸のコモックスバレー地方に位置し、地理的にも隣接している。「双葉会」という俳句吟社の名称は、こうした地理的關係を象徴したものと考えられる。

## 2. 1. 林業・製材業・パルプ製造業

林業（伐木）、製材業、パルプ製造業は、戦前のBC州における日系移民にとって最も重要な就労の場の一つであった<sup>(15)</sup>。これらの労働は特別な技術を要しないことから、新たに渡加した多くの日本人移民にとって主要な就労先となった。伐木・製材・パルプ製造の産業はバンクーバー周辺にとどまらず、バンクーバー島やガブリオラ島へも展開しており、日系人が経営する伐木キャンプや製材所も現れた<sup>(16)</sup>。製材所のある各地に小規模の日系コミュニティが形成されたが、請負や短期契約といった雇用形態のもと、一つの製材所から別の製材所へと職を移る者も少なくなかった<sup>(17)</sup>。

1930年代の邦字新聞『大陸日報』には、製材所やパルプ工場を擁する地域に組織された俳句吟社からの投稿が数多く寄せられた。とりわけ製材業に従事する移民が多かった集住地——フレイザーミルズ（へちま会、後に河畔句会）、ポートアルバーニ（かもめ会）、ポートムーディ（ひさご会）、ロイストン（双葉会）——に加え、パルプ製造工場で労働した日系移民の集住地であるオーシャンフォールズ（早苗会）、ウッドファイバー（すみれ会）でも、俳句愛好者による定期的な句会の開催が確認できる。これらの記事の中には、同人によって詠まれた作品とともに、句会の雰囲気や運営の様子を詳細に伝える記事も見受けられる。例えば、1932年4月25日付『大陸日報』には、ウッドファイバーの「すみれ会」が同年4月11日に開催した句会の様子が報告されているので、これを引用して紹介したい。

當地「すみれ會」も正月<sup>そうそう</sup>匆々會員梅節<sup>(18)</sup>氏宅の火災、引き續き色々な不祥事の爲め永らく句會も開かずに居たが、ほがらかな春光に凶事も去り、人の心も浮き立つ折から、春風氏の長男出生。又豫てより建築申なりし梅節氏宅も出来上がったので、去る四月十一日午後七時より梅節氏新居に於て、兩氏の祝賀句會を開催した。

集まる俳士七名、早速席題「春の朝」について苦吟一時間、小時俳談の後、餘興として袋互選<sup>(19)</sup>をやる、苦吟、哄笑の一時間半の後、まご\／して居る玉星<sup>(20)</sup>君の前に袋全部が集まる、集まる程が氣が焦つて句が出ないと云ふ始末「何だ蛇穴を出るかむづかしいな」「あ、ニンニクが臭いな」などと興じながら、やうやく句作を終へて各出題者が袋の中の投句を清記して互選を終つたのは十一時半、それより梅節氏夫人が心盡<sup>つく</sup>しの茶菓の御馳走になりながら「すみれ會」今後の方針について協議し、或は雑談にふけり、散會したのは午前二時頃であつた。左に當夜の収獲を掲載して大方俳人の御高評を仰ぐ。

当地ウッドファイバーにおける句会は、当時の日系移民社会における慣習に則り、夕食後に開催された。この夜は梅節宅の新築と春風氏の長男誕生という二つの慶事を祝し、久しぶりに7名が集まって句会が催された。中野梅節（本名・勝見、当時31歳）は「すみれ会」の中心的存在として、この夜のホスト役を務めている。まず席題「春の朝」による約1時間の推敲と俳談ののち、4題を使った袋互選へと移行。哄笑と苦吟が入り混じる中、互選は約1時間半にわたり行われた。その後、梅節夫人による茶菓を囲みながら、今後の会の方針についての協議や雑談が深夜まで続き、散会は午前2時頃に及んだ。全体で約7時間にわたる句会の様子は、移民社会における文化的営みの熱気と連帯感をよく物語っている。他地域の俳句吟社でも同様の光景が展開されていたことは想像に難くない。

一方、バンクーバー島東岸のコモックスバレー地域には、製材所のあるロイストンと、これに隣接する炭鉦町カンバーランドの労働者による俳句吟社「双葉会」が存在した<sup>(21)</sup>。1932年7月11日付『大陸日報』には双葉会の句稿が掲載されており、その中で第18回句会が実施されたことが記されている。この情報に基づけば、月に一度句会が開かれていたと仮定した場合、同会は1931年1月以

前には結成されていたと推測される。この句会には、岸本清泉<sup>(22)</sup>、港巷水<sup>(23)</sup>をはじめ、総勢 10 名が参加し、兼題「滝」、「土用干」と、席題「日盛り」、「林檎」に取り組んだ。選句はオカナガンセンターの小林伝兵衛<sup>(24)</sup>に依頼している。

製材所やパルプ製造業の集住地における俳句吟社は、主に男性によって構成されていたが、コミュニティによっては男性会員の妻と思しき女性が句会に同席する例も見られた。ポートアルバーニの「かもめ会」は竹田寅雄（孤村）<sup>(25)</sup>を中心とするグループであり、1935 年から翌 1936 年にかけて『大陸日報』に三度、句稿が掲載されている。同会には総勢 13 名の会員が所属しており、そのうち三千代、露野<sup>(26)</sup>、日出代、光代、登代（女）、みどりの 6 名は女性と推定される俳号を用いて詠句しているのが確認できる。しかし、このように男女混合で活動した吟社は、戦前期においてはごく少数に限られていた。

## 2. 2. 農業

戦前、日系移民のうち農業に従事する者は、林業・製材業・パルプ製造業、漁業に次いで多く、全体の 1 割超を占めた<sup>(27)</sup>。彼らはバンクーバー郊外（バーナビー、ニューウエストミンスター、サレーなど）からプレーザバレー（メープルリッジ、ミッション、ヘイニー、アボッツフォードなど）にかけての広範囲にわたり農地を開拓し、主にバンクーバーに向けて出荷される野菜や果物の栽培に従事した<sup>(28)</sup>。また、BC 州内陸部では、オカナガンバレー地域（バーノン、オカナガンセンター、ケローナ、サマーランドなど）においてリンゴやモモ、サクランボなどの果樹栽培に携わる者も多かった。

このうち、オカナガンセンター（現・レイクカントリー）では、1922 年に小林伝兵衛（芳翠）を中心として、約 10 名による俳句吟社「青葉会」が結成された<sup>(29)</sup>。青葉会は戦前より『大陸日報』に句会記を投稿したり、他地域の俳句吟社の選者を務めたりする<sup>(30)</sup>などして、日系俳壇にその存在感を示していた。1935 年 2 月 12 日付『大陸日報』には、正月 5 日に行われた新年句会記が掲載され、「山と積まれた御馳走に左黨の喜ぶ物も恵まれ、唄に踊に十二分に正月氣分を味わひて」と記されている。この記述からは、彼らの俳句活動が単なる句作にとどまらず、年中行事や慶事を祝う社交的・祝祭的な側面をも併せもっていたことがうかがえる。青葉会は小林が亡くなる 1960 年代まで、40 年以上にわたり息の長い活動が続けられた<sup>(31)</sup>。

ほかに、小杉宇蔵（金盃、サリバン在住）<sup>(32)</sup>、宮崎新造（梅笑、ニューウエストミンスター在住）<sup>(33)</sup>など、戦前に農業に従事していた俳句愛好者は少なくないが、農業共同体における俳句活動の詳細は十分に明らかになっていない。

## 2. 3. 都市部（商業、メディア、金融業など）

日系移民の人口が増加するにつれ、バンクーバーやビクトリアなどの都市部では、旅館や料亭・食堂をはじめ、食料品店、衣料雑貨店、時計販売・修理店、理髪・美容店、写真館、クリーニング店、書店、靴修理店など、日系同胞を対象としたあらゆる種類の商店が営まれるようになった。これらの商店を営む者や従業員として働く者も次第に増え、その数は第二次世界大戦前の 1938 年には約 700 名に達した<sup>(34)</sup>。また、バンクーバーでは、1920 年代には邦字新聞三紙<sup>(35)</sup>が鼎立し、小規模ながらも独自のメディア産業が形成されていた。さらに、田村新吉が営む日加貯蓄などの金融業に加え、保険代理店などサービス業も展開されていた。

バンクーバーに俳句吟社が存在していたことを示す最古の記録は、1910 年代に遡る。戦前にバンクーバー市内で時計販売・修理店を営んでいた松林伸太郎（松峯）<sup>(36)</sup>とその家族が遺したコレクションの中に、“Photo of Nakataro Matsubayashi and Haiku Club”とキャプションが付された一枚の写真（図

1) が含まれている。写真には松林のほか、三宅隆吉（春江）<sup>(37)</sup>、長田正平（波韻）<sup>(38)</sup>の姿も確認できる。1930年に長田が亡くなった際の新聞記事には、永澤六郎（南北）<sup>(39)</sup>による追悼文が掲載されている。そこには「故長田波韻君は『木の子会』の同人として晩香坡の古い俳人の一人であ（った）」<sup>(40)</sup>と記されており、当時の吟社が「木の子会」と称していた可能性がある。



図1 バンクーバー俳句会「木の子会」？（1910年代）  
 前列左から1番目：松林仲太郎（松峯）、3番目：山崎寧？  
 2列目右から1番目：三宅隆吉（春江）  
 最後列左から1番目：茅原佐一郎？（呂憫）、3番目：長田正平（波韻）  
 Matsubayashi Family Collection, Nikkei National Museum 2019.16.1.1.58

1920年代後半から1930年代にかけて、バンクーバーには「あじろ会」と「木の芽会」の二つの俳句吟社が存在した。ただし、これら二つの会はほぼ同じ顔ぶれで構成されていた。あじろ会は1926年に結成され、中澤義雄（笛水）<sup>(41)</sup>および三宅隆吉を中心とする、カナダ俳壇の重鎮らによる吟社であった<sup>(42)</sup>。一方、「木の芽会」は、1928年2月25日、あじろ会のメンバーでもある岩崎与理喜（柿花）<sup>(43)</sup>と山本倫由（睨花）<sup>(44)</sup>によって、自由律俳句（新傾向）を研究することを目的として提唱・設立された。ただし、中澤や三宅は——おそらく彼らが伝統的な五七五の定型を重視していたことへの配慮からか——木の芽会の設立には招かれていない<sup>(45)</sup>。こうして、バンクーバーには、ほぼ同じ顔ぶれでありながらも志向の異なる二つの俳句吟社が並立するという、特異な文化的状況が生まれることとなった。

また、ビクトリアには女性だけの俳句サロン「うき草会」が存在した。ホトトギス同人のスコット沼瀨女の自宅はオークベイ大通りに面しており、そこには娘のベティ（別天女）や甲山清（小百合）<sup>(46)</sup>を中心に、複数の女性たちが集っていた。スコットランド出身の英国人の夫をもち、伝統的な日本文化にも通じていた沼瀨女と、若くして俳句の才に恵まれた別天女は、当時の教養に乏しい一般の日系移民とは一線を画し、異国における理想的なロールモデルとして多くの女性の憧れの存在であった。会の集まりでは、女性たちはともに料理を楽しみ、茶菓を囲んで談笑しながら句作に励むな

ど、定期的に午後のひとときを過ごしていた。その様子は『大陸日報』にも掲載されている<sup>(47)</sup>。1937年10月には別天女が若くして急逝するという悲劇に見舞われたものの、うき草会は1942年2月に日系人総移動令が出されるまで活動を続けた<sup>(48)</sup>。

#### 2. 4. 水産業

俳句吟社の活動が確認されている産業集住地がある一方で、戦前期に日系移民にとって最も重要な就労の場の一つであった水産業コミュニティにおける俳句活動については、現時点で確認できていない。最盛期には4,000人以上の日系移民が漁業やキャナリー（缶詰工場）での労働に従事していたとされ<sup>(49)</sup>、なかでも「サーモノポリス（Salmonopolis: サケの町）」と呼ばれたスティーブストン（現・リッチモンド市の一部）は、戦前期における日系水産業従事者の最大の拠点であった。同地では、漁業従事者の互助組合によって、日本人医師が常駐する医療施設や日本語学校などを備えた、生活基盤の整った日系コミュニティが形成されていた。しかし、これまでの調査では、『大陸日報』紙上俳壇にスティーブストンやナナイモ、スキーナ在住の俳句愛好者個人による投稿がわずかに見られるにとどまり<sup>(50)</sup>、BC州最大の水産業共同体であったスティーブストンにおける俳句活動に関しては、いまだ手がかりが得られておらず、今後の調査の進展が俟たれる。

#### 2. 5. まとめ—俳句活動の地域性と共通性

以上のように、戦前のBC州各地に形成された日系コミュニティでは、産業構造や地域的背景の違いに応じて多様な俳句活動が展開されていた。林業・製材業・パルプ製造業に従事する労働者の間では、夜間に催される句会が日常の労苦を癒す文化的な憩いの場として機能していた。一方、農業地域では、季節の移ろいや年中行事に寄り添った家族ぐるみの社交的な俳句活動が行われていた。また、都市部では、文化資本を有する人々によって、本格的な俳壇形成や自由律俳句の探究といった意欲的な取り組みが進められた。

こうした戦前の俳句活動にはいくつかの共通点も認められる。第一に、邦字新聞『大陸日報』を通じた活動の可視化である。句稿を通じて句会の様子や選句結果を投稿し合うことで、地理的に離れたコミュニティ間に緩やかな文化的ネットワークを築いた。この実践は、俳句愛好者の間にデュルケームのいうところの「集合意識」を育み、俳句を媒介とした文化的再帰性と社会的連帯を可能にした。第二に、吟社の多くが数名から十数名程度の小規模な集まりで、通常家庭や知人宅といった私的空間で活動していた。これにより、句会は俳句愛好者の生活空間に深く根ざした営みとなった。第三に、俳句は人間関係の構築や精神的な拠りどころとしての象徴的な機能を担っていた。ミードやブルーマーの象徴的相互作用論の視点からは、句会における対話的なやり取りの過程が、社会的関係を象徴的に再構築する文化実践であったと捉えられる。

### 3. バンクーバー「あじろ会」と社会文化的地位の再生産

本節では、前節で触れたバンクーバーの俳句吟社「あじろ会」に焦点を当て、その社会的役割を「権力」との関係性において検討する。

1926年に結成されたあじろ会は、邦字新聞『大陸日報』および「加奈陀日本人会」（以下、日会）と深いつながりを有していた。ここでは、両者の概要を整理しておく。『大陸日報』は、1907年6月に創刊された邦字新聞である<sup>(51)</sup>。経営難に直面していた同紙を、山崎寧<sup>(52)</sup>が1908年3月に買収した<sup>(53)</sup>。山崎はさらに翌1909年3月、バンクーバー日本街の有力商店主43名を会員として日会を発

足させ、自ら初代会長に就任した。新保満らの指摘によれば、『大陸日報』の編集方針や、それを支持する日会の構成員は日本への帰属意識が強く、カナダ社会への同化には消極的であった。その姿勢は「反同化志向」と評され、在バンクーバー日本帝国領事館との関係も深い、いわば「体制寄り」の団体であったとされる<sup>(54)</sup>。日会はあくまで日系移民の一部有志による私的団体に過ぎず、日系社会を公式に代表する組織ではなかった。しかし、第一次世界大戦中の1914～15年には、山崎を中心に日系人による「義勇兵」部隊を組織し、欧州戦線に派遣している<sup>(55)</sup>。さらに戦後の1920年4月には、スタンレー公園内に日系カナダ人戦没者の慰霊碑を寄付により建立するなど、あたかも日系社会を代表するかのような活動を展開しており、それらの動きは『大陸日報』紙上でも積極的に報じられた<sup>(56)</sup>。

1926～27年にかけてのあじろ会のメンバー（表3）を確認すると、その多くが『大陸日報』あるいは日会、またはその両方に関与していたことが明らかである。たとえば、1927年1月20日付『大陸日報』に掲載された「あじろ会の記」には、同年1月15日に開催された第三回句会の参加者として、以下の10名が記録されている（会場到着順）：山本倫由（予）、永澤六郎（南北生）、鈴木悦（村正将軍「みをつくし」）<sup>(57)</sup>、田村俊子（鳥の子）<sup>(58)</sup>、岩崎輿理喜（柿花）、中澤義雄（笛水）、三宅隆吉（春江）、曲陽（小宮山高彦？）<sup>(59)</sup>、リラ（小宮山扶三〔子〕？）<sup>(60)</sup>、水戸憲道（愛川）<sup>(61)</sup>。このうち、曲陽・リラ夫妻を除く8名が『大陸日報』また日会の関係者であった。

以下に、山本倫由による句会の記録の一部を引用し、吟社活動の実態を紹介する。

去る一月十五日の土曜日の夜を晩香坡セムリン・ドライブなる予が陋屋に於て、第三回の「あじろ會」の運座を催す。

この日逡巡として雨模様なるを氣にしなが、午後六時世話掛なる南北生を伴い歸り、待つ程なく村正将軍「みをつくし」と假りに名乗り給ふて、鳥の子夫人同伴にて來られたのは珍らしい。やがて柿花、笛水相次いで來る而して晩市句会の元老春江の來るや早速にして「早春亂題」の句作に入る事とする。

この作句なかばにして曲陽、リラ夫人を伴ひて來り加はる、またこの夜大谷教會に結婚式を司り終えたる愛川氏、フロックコートにて來り會し、その何れも相寛容くつろぎて句境に入る。鳥の子夫人、春江、新進の柿花相次いで名吟を吐くも、多作家をもつて鳴る笛水僅に二句を投ずるのみ。

（中略）

ことに春江（三宅）の句「春の夢朧に浮いて汽車の揺れ」は各人の投票をひとりて集め、その人氣たるや、二十餘年昔の「夏木立」の金時計以來の出來事であつた。

この句會を終えて一同歸路についたのは、澆季溷濁の俗界、今將に明け離れんとする翌朝六時半であつた<sup>(62)</sup>。

この記録からは、10名の参加者が「早春亂題」、「木の芽」、「春の夢」の三つの季題のもと——おそらく夜食や茶菓を挟みながら——およそ12時間半にわたる句會を楽しんだ末、散會したことがうかがえる。

ところで、あじろ会はこの句會に先立つこと、1926年12月9日付の『大陸日報』紙上において、在カナダ同胞一般を対象に俳句の募集広告を掲載した。これによれば、課題は「早春亂題」で、早春に関するものであれば内容は自由、句数の制限もなく、大陸日報社内の「南北」（永澤六郎）宛に投稿するよう呼びかけられている。締め切りは1927年1月12日で、選句は1月中旬に予定されている會合にて行ふ旨が記されていた。かくして、合計104句の募集があり、1月23日金曜日に三宅、

中澤らあじろ会の重鎮メンバーが選者として集まり、評定が行われた。1月25日付『大陸日報』紙面には、評定の様子を傍観した主筆・永澤による顛末記とともに、天・地・人の三光ならびに五客を含む計24句の入選作が発表された。

『大陸日報』紙上における、あじろ会の俳句活動および主催による紙上応募句コンテストは、1930年代から戦時収容期、さらには戦後を通じて日系カナダ移民社会における俳句活動を活性化する導火線のような役割を果たすこととなった。以後、このあじろ会による紙上コンテストは、確認できる限り1932年まで継続され、通算62回を数えた。応募句数は回を重ねるごとに増加し、一つの季題に対して150～200句、三つの季題を合わせて計800句以上が寄せられることもあった<sup>(63)</sup>。紙面上で紹介される各地の入選者の名前は、俳句愛好者の間で広く知られるようになり、直接の面識がないにもかかわらず特別な連帯感を生み出す契機ともなった。1933年には、その役割を「大陸俳壇」に譲り、紙上俳句コンテストはあじろ会の手を離れることとなる。

バンクーバー「あじろ会」の俳句活動および紙上コンテストは、単なる文学的趣味の発露にとどまらない。それは、日系カナダ移民社会における社会文化的地位の再生産と象徴的承認の場であったと

表3 「あじろ会」メンバー (1926～1927)

会員名	号	生年	本貫	プロフィール
三宅隆吉	春江	1978	広島県	「加奈陀日本人会」事務局長。1909年に中西兼吉と不動産事業を始めるも、損失を招き失敗。以後、再び山林伐木事業のフォアマン(人夫長)として活躍した。
中澤義雄	笛水	1885	山梨県	商社(日加興業社)勤務を経て、パウエル街の「渋谷商店」の支配人を務める。
宇都宮鹿之助	孤鹿 / 一瀉風	1887	愛媛県	代理業(代書・一般周旋)の傍ら、婦人衣料品店を経営。日会評議員。
岩崎輿理喜	柿花	1892	岡山県	『大陸日報』支配人。大陸日報社社長山崎寧の姪の女婿。後に大陸日報社社長となる。
山本倫由	睨花	1890	高知県	『大陸日報』記者。
長田正平	波韻	1879	東京市	『大陸日報』記者。第1回句会にのみ参加。「あじろ会」の名づけ親。著作に『加奈陀の魔窟』。歌人・石上露子の若かりし頃の「不滅の恋人」。
松村松之助?	松雨	1881	和歌山県	第2回句会に参加。詳細不明。
水戸憲道	愛川	不明	不明	米国・南カリフォルニア大学で学んだ後、桑港新世界新聞に入社。カナダ入国時期不明。真宗大谷派開教師・戯曲作家。バンクーバーでは1926年11月に二回にわたって自作の戯曲による少女歌劇を上演。戯曲はたびたび『大陸日報』に掲載された。第2回～第4回句会に参加。
鈴木悦	みをつくし	1886	愛知県	1924年3月『日刊民衆』創刊、社主・主筆。元『大陸日報』主筆。第3回句会に参加。
田村(鈴木)俊子	鳥の子	1884	東京市	作家。鈴木悦の妻。第3回～第5回句会に参加。
不明	曲陽	不明	不明	第3回句会に妻リラを伴って参加。長野県出身の小宮山高彦(1885年生、俳号はほかに千曲)と推測される。
不明	リラ	不明	不明	曲陽の妻。第3回は夫に同伴して参加も見学のみ。第4回に単身で初参加。田村俊子の親友の小宮山扶三(子)(1890年生、長野県出身、戦前カナダ日系短歌界の第一人者)と推測される。
高木佐富?	司月斎	不明	不明	オーシャンフォールズ在住。第5回句会に参加。
永澤六郎	南北	1885?	宮城県	『大陸日報』編集長。一面にてコラム「世間話」を担当。東京大学出身の動物学者。人呼んで「大正の碩学」。記録者として同席するが、詠句はしない。

第1回句会は1926年の7～10月に行われたと推測されるが、実施月日不明。第2回句会は1926年11月27日開催(会場は中澤笛水宅)。第3回句会は1927年1月15日開催(山本倫由宅)。第4回句会は1927年2月12日開催(中澤笛水宅)。第5回句会は1927年6月11日(同)。

考えられる。ここでは、ブルデューの概念である「文化資本」および「ハビトゥス」に照らして、その社会的機能を分析する。

まず、あじろ会が提供した紙上俳句コンテストは、「身体化された文化資本」としての文化実践の場であった。作法や表現様式、季語に対する感性といった俳句独自の形式の習得と実践は、日系同胞の間で一種の教養と品位の証明とみなされることがあった。こうした美的感受性の共有は、集団的に内面化される「ハビトゥス」として機能し、参加者同士の相互認識や象徴的差異化を可能にしていた。また、紙上俳句コンテストやその入選発表は、「制度化された文化資本」としての側面も有していた。主催者はもとより入選者の名前が公に揭示されることで、その人物の象徴的地位が日系社会の中で承認される仕組みが形成されていた。俳句活動を通じて築かれた名声や評価は、経済資本や政治資本とは異なる軸での社会的序列や差異の構築に寄与した。これは、特定の人物群——とりわけ『大陸日報』や日会の関係者——による象徴的権威の集中と再生産を可能にしていた点でも注目される。さらに、俳句活動は日本文化の継承・再構築の手段であると同時に、日系共同体内部でのヒエラルキー形成にも寄与した。あじろ会は、ブルデューのいう「場 (champ)」として、文化的正統性をめぐる競争が展開される舞台であり、そこにおけるノモス (規範) は、俳句という形式言語の習熟度によって規定されていた。

したがって、あじろ会の俳句活動は、個人の趣味的実践という側面を超え、文化資本とハビトゥスの相互作用によって支えられた社会的秩序の再生産の場として理解されるべきである。特に、あじろ会はその象徴的ヒエラルキーの頂点に位置する組織であり、特定の人物のみが出入りを許された、いわば疑似会員制の「サロン」として機能していた。同会は『大陸日報』ならびに日会と密接に結びつくことで、日系社会における特定の社会文化的地位を創出・強化する役割を担っていたのであり、この構造はまさに、グラムシの「ヘゲモニー」概念に照らして、日系エリート支配層が文化的リーダーシップを通じてその地位を正当化し、日系コミュニティ内における「同意」の獲得を図ったことの証左であろう。

#### 4. 本国俳誌投稿にみる象徴的帰属と文化的洗練の承認

ところで、こうしたカナダ在住の日系移民俳句愛好者の中には、日本本国の俳句雑誌（以下、俳誌）に積極的に投稿を行う者も少なからず存在した。本節では、そうした本国俳壇との交流の実態を概観しつつ、それがもたらす象徴的帰属や文化的承認の意味について考察する。

米国、カナダ、ブラジルなど、海外の移民地に定住した日系人俳句愛好者がしばしば投稿先として選んだ俳誌の一つに『南柯』がある。俳句結社「南柯」は、内藤鳴雪、武田鶯塘、巖谷小波らを主宰に1913（大正2）年に創設された。その俳誌は早くから海外に移民した俳人たちに門戸を開いていたことで知られている。例として、1910年代に米国ユタ州の「和察知吟社」<sup>(64)</sup>から送られてきた俳句作品については、鳴雪自らが10～20句程度を選び、誌面の半ページ（時には3分の2ページ）を割いて掲載していた。こうした柔軟な姿勢から、『南柯』は、海外在住俳人にとって投稿しやすい環境を備えていた俳誌であったといえる。

カナダに移民した日本人俳句愛好者の中にも、「南柯」と関わりをもつ者が見られる。たとえば、前述の長田正平は巖谷小波の門下生であり、1920～30年代の「南柯」幹部とは兄弟分の間柄にあったとされる<sup>(65)</sup>。また、『大陸日報』紙上で俳句講師を務めた佐野駒蔵（未入）<sup>(66)</sup>も、「南柯」の古参同人の一人であった<sup>(66)</sup>。

1920年代後半、カナダ在住同胞の間で俳句熱が高まるなか、1932年頃より「加奈陀火曜会」のメ

ンバーによる『南柯』への投稿が活発化していく。『南柯』1932年3月号に森明星<sup>(67)</sup>——彼は戦前では数少ない帰加二世<sup>(68)</sup>の俳人だった——による「第八拾壹回會報」が掲載されており、これを月例会そして逆算すれば、「加奈陀火曜会」の創設は1926年の5月に遡ると推定される。「加奈陀火曜会」についての詳細は不明であるが、当時のBC州各地の日系集住地を結んだ通信型俳句ネットワークであったと考えられる。実際、『南柯』1933年1月号から12月号にかけて、以下の人物とその作品が確認される。八木美津朗<sup>(69)</sup>、井上三竿井<sup>(70)</sup>（以上、オーシャンフォールズ「早苗会」）、中野梅節、吉川梅川<sup>(71)</sup>、島田玉星（以上、ウッドファイバー「すみれ会」）、森明星、森本参木<sup>(72)</sup>（バンクーバー）、港巷水（ロイストン）、芳賀翠潮<sup>(73)</sup>（フレイザーミルズ「河畔句会」）、真神北斗<sup>(74)</sup>（ポートアルバーニ）、猪又織月<sup>(75)</sup>（サンベリー）、小杉金盃（サリバン）などである。これらの俳句は、それぞれの俳号に加えて「カナダ」あるいは「加奈陀」といった地名が明記され、居住地の表記を伴って誌面に掲載されていた。また、『南柯』の「支社吟と各地俳報」欄には、日本国内の各地の支社と並んで「加奈陀火曜会」の会報も収められていた。これにより、「南柯」同人の間では、カナダの日系俳句愛好者の存在は一定程度認知されていたと考えられる。

このような投稿活動には、日本本国との文化的連関を維持し、祖国との精神的なつながりを志向する象徴的帰属としての側面が認められる。他方で、それはまた、自己の俳句表現が在カナダ日系社会という限定された文化圏を超え、日本本国の俳壇にも通用することを証明する「文化的承認の装置」としての機能も果たしていた。すなわち、『南柯』への掲載は、日系俳人にとって、自らの文化的洗練——エリアスのいうところの“civilizing process”——を可視化する手段であり、それによって象徴的な社会的優位性を主張する行為でもあった。さらにいえば、このような文化的実践は、マイノリティとしての制約を受ける移民社会の中において、文化的主体性や自尊心を保持・再構築するための営みであり、排除された社会的空間の内部において自己価値を確保するための文化的戦略として理解される必要がある。俳句という言語芸術は、単なる趣味や文学的営為を超えて、彼らのアイデンティティ形成と同胞社会における社会的ポジショニングに深く関わる文化資本として機能していたのである。

## おわりに

本研究は、第二次世界大戦前のカナダBC州における日系移民の俳句活動を、従来の作品分析や文学史的アプローチにとどまらず、社会学的視点から再定位する試みであった。具体的には、デュルケムの「集合意識」論に基づき、俳句活動を準宗教的儀式と捉え、ブルデューの「文化資本」論から吟社を文化的ヒエラルキーの構築装置として位置づけ、さらにグラムシのヘゲモニー理論を援用することで、俳壇や吟社がエスニック社会内部での同意形成と規範維持に果たした役割を明らかにした。俳句を媒介とした相互作用は、職業別に形成された日系共同体内部における文化的規範の醸成に寄与したのみならず、邦字新聞俳壇を通じた地理的・越境的ネットワークを可能にし、「想像の吟社共同体」の構築をもたらしたといえる。

このような視点は、俳句ならびに俳句活動を社会的実践として捉える新たな理解を提示するものである。とりわけ注目すべきは、俳句活動が単なる娯楽や趣味の域を超え、文化的資本の蓄積と再生産を通じて、日系社会内における階層的秩序や文化的エリート性の構築に寄与していた点である。吟社の運営や俳壇での選句活動は、参加者に「洗練」された行動様式や言語感覚の習得を促し、それが移民社会における権威や地位を裏づける象徴的行為ともなっていた。また、一部の俳句愛好者が日本本国の俳誌に投稿していた事例に見るように、俳句活動は移民という周縁的存在が文化的に本国との結

びつきを模索する実践でもあり、自らの文化的優位性へのアクセスを志向する試みでもあった。こうした視点から俳句活動を捉え直すことで、それが不安定な社会的位置にある移民たちにとって、自己のアイデンティティを再確認する契機となり、文化的連帯と社会的承認を得るための重要な実践空間であったことが浮かび上がる。

---

## 註

- (1) 盛岡生まれ (1879～1935)。本名・英太郎。1903年渡米。1911年、自由律俳句の旗手・萩原井泉水が主宰する俳誌『層雲』に参加。以後、自由律俳句に傾倒し、生涯で3万句を詠む。直原敏平(註2)とカリフォルニア州アップランドに俳句吟社「紙燭会」を結成した。翌年「レモン詩社」と改名、機関句誌『れもん帖』を出版した。日系社会で俳句の普及に尽力し、帰郷することなく米国で生涯を終えた。
- (2) 岡山県生まれ (1869～1929)。号は行人。1903年に渡米し、カリフォルニア州アップランドに定住。開墾請負業を経て農場経営に携わり、発明した農業器具のいくつかで特許を取得。下山逸蒼が「レモン詩社」を離脱後は同吟社の主宰者となり、機関句誌『トシヘー』を刊行した(第2号で終刊)。
- (3) ワシントン州シアトルを拠点とする俳句吟社。川尻杏雨(慶太郎)、小池晩人(恭)らによって1934年結成。90年余を経た2025年現在も活動を継続している。
- (4) 熊本県生まれ (1886～1969)。本名・すず(鈴子)。旧姓・市来。吉岡禅寺洞から俳句の手ほどきを受け、『ホトトギス』、『玉藻』に投句した。英国人のパーシー・W・A・スコットと結婚し、朝鮮・宣川に移住する。1931年、カナダ・ブリティッシュコロンビア州ビクトリアに移住。女性だけの俳句吟社「うき草会」を主宰するとともに、邦字新聞『大陸日報』紙の「大陸俳壇」で選者を務めた。娘のベティ(俳号・別天[女])も俳句を詠んだが、1937年10月に腎臓を患い、18歳の若さで急逝した。
- (5) 新潟県北蒲原郡笹神村笹岡(現阿賀野市笹岡)出身 (1898～1979)。本名・謙二郎。少年時代から俳句に親しみ、15歳より『ホトトギス』に投句を始める。1927年、開拓移民として一家でブラジルに渡る。以後、現地の邦人に俳句の指導を続けた。
- (6) 香川県出身 (1911～2008)。本名・秀一(ひでかず)。佐藤念腹に師事し、日系移民の間に俳句を広めただけでなく、ブラジルにおけるポルトガル語の三行詩「ハイカイ」の普及にも尽力した。
- (7) 俳句が世界的に紹介され始めた19世紀末から20世紀初頭は、「俳句」という名称がまだ国際的に統一されておらず、フランスでは「ハイカイ(haikai)」という呼称が用いられた。この呼称がポルトガル語圏であるブラジルにも伝わり、現在でも「ハイカイ(haicai)」として定着している。
- (8) 米国では、一般の日系人を対象に強制的に移住・収容した施設は、公式には「戦時転住センター(War Relocation Centers)」と呼ばれた。そのほか、敵性外国人とみなされた者を収容する施設は「強制収容所(Internment Camps)」、「抑留所(Detention Camps)」と呼ばれた。一方、カナダでは、一般の日系人を対象とした強制収容施設として「収容所(Incarceration Camps)」が設置されたほか、「反抗分子」とみなされた人びとを収容する「POW Camps(捕虜収容所)」も存在した。
- (9) モンタナ州フォートミズーラ(Fort Missoula)に設置された敵性外国人抑留所。桑井(2011)は、モンタナ州フォートミズーラ抑留所、ニューメキシコ州ローズバーグ(Lordsburg)抑留所、同州サンタフェ(Santa Fe)抑留所における俳句ほか短詩型文芸活動の資料を紹介している。

- (10) BC 州ホープ (Hope) の東 (現・サンシャインバレー [Sunshine Valley]) に位置する農場跡地に 1942 年から 1946 年まで設置されたタシメ強制収容所 (Tashme Incarceration Camp)。「タシメ (Tashme)」という収容所名は、日系人強制移動・収容政策を実行した BC 安全保障委員会 (BC Security Commission) のメンバー、オースティン・テイラー (Austin Taylor)、ジョン・シラス (John Shirras)、フレデリック・ミード (Frederick Mead) の各姓から頭 2 文字を取って組み合わせた造語。
- (11) もっとも、デュルケームが想定した宗教的儀礼とは異なり、俳句吟社の句会は制度化された教義や超越的存在を欠いたものである。その意味で、ここで観察される集合性は、移民という不安定な社会的条件のもとで、反復的实践を通じて暫定的に維持される、きわめて脆弱な集合意識であったと考えられる。
- (12) この点で、俳句吟社における集合性は、既成の価値体系に基づく統合というよりも、日常的相互行為の積み重ねによって都度生成される流動的な社会的現実として理解されるべきであり、象徴的相互作用論は、集合意識を所与の前提とするのではなく、その可変的な生成過程を捉え直すための分析的手がかりを与える。
- (13) ただし、ブルデューの文化資本論が主として国民国家内部における階級再生産を前提としているのに対し、戦前の日系移民社会は人種的排除や法的制約によって主流社会での社会移動が著しく制限されていた。そのため、俳句を通じて蓄積された文化資本は、外部社会への上昇移動を指向するものではなく、むしろコミュニティ内部における象徴的差異化や序列化に向けて作用していた点に特徴がある。
- (14) もっとも、日系移民社会におけるヘゲモニーは、国家権力に裏打ちされた支配とは異なり、共同体内部に限定された、常に異議申し立ての可能性を孕んだ脆弱な同意形成であったと考えられる。
- (15) 末永 (2006) によれば、1938 年時点における在カナダ日本人および日系カナダ人の人口は 22,840 人であり、そのうち労働力人口 (本業者数) は 7,601 人である。1938 年時点における就労人口が最も多かったのは伐木・製材・パルプ製造の木材関係業者で、1,804 名。
- (16) これらの製材所の中には、日系移民によって経営されたものも存在した。例えば、ガブリオラ島では新出芳松が 1919 年「サンライズ木材社」(Sunrise Lumber Co.) を設立し、またバンクーバー島ロイストンでは上西寛之助、内山健六、湊敬二らによって「ロイストン木材社」(Royston Lumber Co.) が共同経営された。さらに、同島のファニーベイには、花月栄吉が 1929 年に「ディープリバー伐木会社」(Deep River Logging Co.) を設立している。
- (17) 例えば、静岡県出身で製材工・俳句愛好者でもあった竹田寅雄 (俳号・孤村、1902～1984) は、1920 年代半ば頃にアラートベイの製材所に勤務し、1928 年頃にはウッドファイバーのパルプ製造所で、1932 年頃にはポートムーディの製材所で働いていた。その後、1930 年代後半から 1941 年にかけては、勤務先をポートアルバーニの製材所へと移している。
- (18) 本名・中野勝見 (1901～没年不詳)。福岡県築上郡椎田町 (現・築上町) 出身。弟の中野武雄 (号・雨情) は、1964 (昭和 39) 年歌会始 (御題「紙」) に寄せられた 46,886 首から選歌 12 首の一つに選出され、カナダ在住者として初めて選歌に入った。
- (19) 俳句や短歌などの作品を選ぶ際に用いられる、匿名による互選方式の一つ。
- (20) 本名・島田徳蔵。福岡県出身 (1903～没年不詳)。カスロー収容所を経て、1945 年日本に帰国。
- (21) 双葉会という名称は、両町の地理的關係性を象徴しているものと考えられる。
- (22) 可能性として、本名・勇吉。広島県出身。カンバーランドにて農業および雑貨店を営む。
- (23) 可能性として本名・敬二。和歌山県出身。ロイストン製材所に勤務。

- (24) 長野県小県郡小泉村（現・上田市小泉）出身（1978～1968）。
- (25) 静岡県安倍郡不二見村村松（現・静岡市清水区村松一丁目）出身（1902～1984）。タシメ収容所における俳句クラブの中心メンバーの一人。戦後はケベック州ファーンナムに移住した。
- (26) 本名・竹田だい（大）。竹田寅雄（註25）の妻。静岡県安倍郡不二見村村松（現・静岡市清水区幸町）出身（1908～没年不詳）。
- (27) 末永（2006）によれば、1938年時点における漁業就労人口は1,084人で、伐木・製材・パルプ製造の木材関係業者に次いで二番目に多い業種であった。
- (28) なかでもイチゴの栽培は盛んで、品質の高さと生産量の多さから市場でも高い評価を受けていた。
- (29) メンバーに、引地とめ（若子）、伊藤珍太、沢鉄治郎（喜柿）、小林ひろ（葉子）、太地豊吉（峰月）、太地恵以（恵）、小林幾江（みどり）、千葉善七（孤月）、竹中清松（竹嵐）、宍戸英次郎（春雨）など。
- (30) 例えば、小林伝兵衛（芳翠）はコモックスバレー「双葉会」の選者（『大陸日報』1932年7月11日号）、伊藤珍太はオーシャンフォールズ「早苗会」の選者（『大陸日報』1932年3月23日号）を務めている。
- (31) 青葉会創立40周年を記念して、『ニュー・カナディアン』紙上で記念祝賀句の募集が行われた。これには、カナダ在住者のみならず日本に帰国した俳句愛好者からも祝吟が寄せられた（1962年5月2日付）。
- (32) 滋賀県出身（1875～1959）。スローカン収容所を経て、トロントに移住。
- (33) 滋賀県出身（1892～1973）。カスロー収容所を経て、トロントに移住。
- (34) 末永、2006, pp. 4-5.
- (35) 1924年3月21日に『日刊民衆』（旧・『労働週報』）が創刊されたことにより、『大陸日報』（1907年6月22日創刊）、『加奈陀日々新聞』（1923年9月9日創刊、旧・『加奈太新報』）と合わせて、三紙鼎立の体制が確立した。
- (36) 滋賀県蒲生郡金田村西庄（現・近江八幡市西庄町）出身（1878～1951）。バンクーバー市内で時計店を営む。スローカン収容所、バイファーム収容所を経て、オンタリオ州ハミルトンに移住。
- (37) 広島県出身（1878～1953）。バンクーバーで不動産事業に着手するも失敗。その後は、ラスキンで山林伐木業の人夫長（ボス）を務めた。サンドン収容所、バイファーム収容所を経て、ケベック州モンリオールに移住。
- (38) 東京市麹町区紀尾井町（現・東京都千代田区紀尾井町）出身（1879～1930）。1903年、カナダに渡る。『加奈太新報』記者を経て、『大陸日報』の記者。『加奈陀の魔窟』の著者として知られる。歌人・石上露子の若き日の「不滅の恋人」。
- (39) 宮城県古川町（現・大崎市古川）出身（1885?-1961）。京都帝国大学を経て東京帝国大学動物学専攻卒業後、同大学院理科に進学。動物学研究者にして、東京動物学会『動物学雑誌』の編集委員を務める。シアトルに留学後、バンクーバーに留まり、『大陸日報』主筆を経て、『日刊民衆』の編集主任。開戦直前の1941年3月に帰国。
- (40) 『大陸日報』, 1930年3月29日号。
- (41) 山梨県出身（1885～1965）。スローカン収容所を経て、オタワに移住。
- (42) 会の名称は長田正平（波韻）の命名によるとされる（『大陸日報』, 1930年3月29日号）。
- (43) 岡山県出身（1892～没年不詳）。『大陸日報』支配人。大陸日報社社長・山崎寧の姪と結婚し、後に大陸日報社社長となる。ニューデンバー収容所を経て、トロントに移住。
- (44) 高知県出身（1890～1946）。『大陸日報』記者。スローカン収容所からトロントへ移住途上に急

逝した。

- (45) 「木の芽会」という名称は、「あじろ会」の第 1 回『大陸日報』紙上コンテストの季題「木の芽」に由来するものと考えられる。『大陸日報』1927 年 1 月 20 日号によれば、バンクーバーの「あじろ会」は同年 1 月 15 日に第 3 回句会を開催し、その際に「鳥の子」こと田村（鈴木）俊子について、記録係の山本倫由が「四句に合計十点を得て、その豊かなる詩才を示す」と評している。そのうちの一句を以下に示す。

雨明るし木々の芽軽やかにのび 鳥の子

- (46) 東京府下豊多摩郡渋谷村（現・東京都渋谷区）出身（1886～没年不詳）。順天堂病院看護科を卒業後、1909 年にビクトリアに渡る。スローカン収容所を経て、ケベック州モンリオールに移住。著書に『スロー湖畔の思い出』（甲山清子名義、1959 年、ゆり歌会岡山支部発行）がある。
- (47) 『大陸日報』1927 年 3 月 29 日号（面）・30 日号（2 面）に、甲山清（小百合）による「うき草句会報」が掲載されている。3 月 21 日には、ビクトリアのピーコンヒル公園を散策しながら句作を行ったと記されており、折しも春雨に見舞われたため、即席の題として「春雨」に取り組んだ様子などが描かれている。
- (48) 『大陸日報』1941 年 11 月 14 日号（6 面）に掲載された、同月 9 日に開催された句会の様子と作品を伝える弥生（本名不詳）による「うき草句会だより」が、確認できる限り最後の掲載となっている。
- (49) Adachi, 1976, p. 47.
- (50) 須村生（スティーブストン、1927 年 3 月 25 日号）、森本参木（スティーブストン、1927 年 3 月 26 日号）、春紅（ナナイモ、1927 年 9 月 22 日付）、一美（スキーナ、1932 年 6 月 21 日）。
- (51) 『大陸日報』に先立ち、1903 年 11 月 3 日には鍋木五郎によって活版印刷による最初の邦字新聞『加奈太新報』が発刊されている（1904 年 3 月 1 日に日刊化）。
- (52) 富山藩富山町（現・富山県富山市）出身（1870～1941）。1888 年に渡米し、米国サンフランシスコに渡航。1894 年にはカナダ・バンクーバーに移住し、その後長年にわたり同地を拠点に活動した。1932 年、日本に帰国。1941 年、静岡県興津にて死去。
- (53) 新保ほか, 1991, p. 49.
- (54) 新保, 1986, pp. 86-91; 新保ほか, 1991, p. 56; 和泉, 2020, p. 79.
- (55) 新保, 1986, pp. 92-95; 田村, 1992, p. 106.
- (56) 『大陸日報』, 1920 年 4 月 9 日号（5 面）。
- (57) 愛知県渥美郡老津村（現・豊橋市老津町）出身（1886～1933）。『萬朝報』元記者。1918 年、山崎寧の招きでカナダに渡る。『大陸日報』主筆を経て、『日刊民衆』を創刊。カナダ日本人の労働組合活動を指導した。
- (58) 東京府東京市浅草区蔵前町（現・東京都台東区蔵前）出身（1884～1945）。小説家。代表作に『木乃伊の口紅』（1914）がある。1909 年に田村松魚と結婚したが、1918 年に鈴木悦を追ってカナダ・バンクーバーに移住（松魚とはのちに離婚し、悦と再婚）。1936 年に悦が死去したのを機に帰国し、その後上海へ渡り、現地で死去した。
- (59) 長野県出身の小宮山高彦（1885～1970）と思われる。バンクーバー市内のカナダ商業銀行（Bank of Commerce）にて用務員として勤務。レモンクリーク収容所、スローカン収容所、ニューデンバー収容所、ケベック州ファーナムを経て、その後モンリオールに移住。
- (60) 長野県出身（1890～1935?）の小宮山扶三たけみと思われる。夫は高彦（註 59）。歌人。太田水穂「潮音社」門下。1910 年代～20 年代初期にかけてバンクーバーで活動していた短歌作家の集団「あ

かつき会」の中心メンバー。1927年に同地で結成された「あかね会」においても中心的な役割を担った。作家・田村俊子と親交があり、扶三が病床にあった際や死去した際には、俊子が追悼の句を詠んでいる。

- (61) 出身・生没年不詳。米国・南カリフォルニア大学で学んだ後、桑港新世界新聞に入社。カナダへの入国時期は不明。真宗大谷派の開教師であり、戯曲作家としても活動した。帰国後は幼児教育に力を注ぎ、1973年に設立された敬愛学園（大阪府茨木市）では初代理事長を務めた。
- (62) 『大陸日報』1927年1月20日号（2面）。
- (63) 『大陸日報』1928年1月1日号（6面）。第四回応募句の際に、194名から836の投句があった。
- (64) 「和察知吟社」の名は、ユタ州にあるワサッチ山脈に由来する。「和察知吟社俳句」の掲載は、『南柯』1918（大正7）年2月号から1919（大正8）年10月号にかけて確認できる。
- (65) 『大陸日報』1930年3月15日号（1面）、山本倫由による寄稿「長田さんのことども」。
- (66) 1941年、武田鶯塘の七回忌に際してオーシャンフォールズの早苗会を中心に日系俳人から追悼句を募った際にも、佐野の名がその中に見られる（『大陸日報』1941年8月2日号（6面））。
- (67) 本名・勘一（1909～2003）。カナダ生まれ（本貫は滋賀県）。戦前はパウエル街の誠心堂（薬局）に勤務していた。戦後、オンタリオ州トロント郊外ストウビル（Stouffville）に移住した。
- (68) カナダで出生し、幼少期に日本の親族のもとに預けられて日本で教育を受けた後、再びカナダへ戻った日系移民二世を指す用語。
- (69) 本名・三郎（1908～没年不詳）。広島県出身。アルバータ州レスブリッジに移住した。
- (70) 本名・貞蔵（さだぞう）（1905～没年不詳）。鹿児島県出身。戦後、日本に帰国。
- (71) 本名・十郎（1899～没年不詳）
- (72) 本名・利三郎（りさぶろう）（1886～没年不詳）。和歌山県出身。『大陸日報』の印刷工。スローカン収容所を経て、日本に帰国。
- (73) 本名・輝治。生没年不詳。宮城県出身。
- (74) 本名・一三（いちぞう）または梅太郎。北海道出身。
- (75) 本名・庄太郎（1883～没年不詳）。宮城県出身。カスロー収容所を経て、戦後日本に帰国。

---

## <引用文献>

- 東聖子、藤原マリ子編．(2012).『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』笠間書院．
- 天野剛至、ジャン＝ピエール・アントニオ、ジャクリーン・ピアース．(2025).「強制収容期における在カナダ日本人移民の俳句活動—カスロ、ニューデンヴァー、ローズベリー収容所を中心に」『常葉大学外国語学部紀要』, 41, 19-42.
- アンダーソン、バネディクト．(1987). 白石隆・白石さや訳、『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』リプロポート．[= Anderson, B. (1983). *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. Verso.]
- 和泉真澄．(2020).『日系カナダ人の移動と運動—知られざる日本人の越境生活史』小島遊書房．
- エリアス、ノルベルト．(1969). 赤井慧爾、中村元保、吉田正勝訳、『文明化の過程 上—ヨーロッパ上流階級の風俗の変遷』、波田節夫、溝辺敬一、羽田洋、藤平浩之訳、『文明化の過程 下—社会の変遷／文明化の理論のための見取図』法政大学出版局．[= Elias, N. (1939). *über den Prozeß der Zivilisation*. Verlag Haus zum Falken.]

- 蒲原宏 . (2020). 『畑打って俳諧国を拓くべし—佐藤念腹評伝』 大創パブリッシング .
- 久富木原玲 . (2020). 「日本の俳諧・俳句からブラジルのハイカイへ—日本文化の特異性と新展開」 『愛知県立大学文学文化財研究所紀要』 , 6, 138-120.
- 久富木原玲 . (2024). 「熱帯歳時記「アマゾン季寄せ」の特色と意義—『ブラジル歳時記』との比較を通して」 『愛知県立大学日本文化学部論集』 , 15, 158-138.
- 桑井輝子 . (2005). 「在米日本人『移民地芸』 覚書 (2) 「我が名を」 永遠に一自由律俳句と直原敏平」 『SELLA』 , 35, 15-26.
- 桑井輝子 . (2011). 「短歌・俳句・川柳が詠むアメリカ抑留所—JICA 横浜海外移住資料館所蔵短詩型文学資料紹介」 『JICA 横浜 海外移住資料館研究紀要』 , 5, 76-88.
- 桑井輝子 . (2012). 「下山逸蒼と『層雲』 再考」 『百合女子大学研究紀要』 , 48, 35-51.
- 桑井輝子 . (2015). 「北米俳句の一世紀—レニア吟社の歩みを中心に」 『言語・文学研究論集』 , 15, 1-12.
- クラウリー, シェーロ . (2012). 「アメリカの俳句における季語」 マカート純子訳, 東聖子・藤原マリ子編 『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』 笠間書院, 155-179.
- グラムシ, アントニオ . (1978). 石堂清倫訳, 『グラムシ獄中ノート』 三一書房. [= Gramsci, A. (1977). *Quaderni del carcere*, a cura di Valentino Gerratana, Einaudi.]
- 坂本宮尾 . (2019). 「この道をかゆく 近代女性俳人伝 (5) 異郷で俳句を詠む—スコット沼薨女」 『俳壇』 , 36 (5), 168-173.
- 白石佳和 . (2021a). 「季語をめぐる国際ハイクのオーセンティシティについての考察：ブラジルハイカイにおける増田恆河の仲介行為を例に」 『人間社会環境研究』 , 42, 49-65.
- 白石佳和 . (2021b). 「『自然諷詠』 と Kigologia をめぐって—日系俳句とブラジルハイカイの仲介者増田恆河の果たした役割」 *Múltiplas faces de pesquisa japonesa internacional: integralização e Convergência*, 251-266.
- 白石佳和 . (2022). 「ブラジル日系俳人増田恆河の連句活動の意義」 『金沢大学国語国文』 , 47, 92-78.
- 新保満 . (1986). 『カナダ日本人移民物語』 築地書館 .
- 新保満, 田村紀雄, 白水繁彦 . (1991). 『カナダの日本語新聞—民族移動の社会史』 PMC 出版 .
- スエナガ, エウニセ . (2018). 「ブラジルのハイクとハイカイ、そしてハイカイ集『百枚の花びらの菊』について—翻訳・模倣・オリジナリティー」 久富木原玲訳, 『物語研究』 , 18, 218-203.
- 末永國紀 . (2006). 「カナダ・ヴァンクーヴァーにおける日系カナダ人の居住地域と営業活動—1938年の調査と滋賀県出身者を中心に」 『経済學論叢』 57(4), 1-56.
- 大陸日報社 . (1907-1941). 『大陸日報』 . (UBC 図書館オープンコレクション) <https://open.library.ubc.ca/collections/tairikunipp>
- 高木 (北山) 眞理子 . (2009). 「俳句・短歌・川柳を通してみる一世女性の心情—ハワイ社会史の一ページとして」 『愛知学院大学文学部紀要』 , 38, 1-10.
- 田村紀雄 . (1992). 『鈴木悦—カナダと日本を結んだジャーナリスト』 リプロポート .
- デュルケ[ー]ム . (1975). 古野清人訳, 『宗教生活の原初形態』 上・下, 岩波書店. [= Durkheim, É. (1912). *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie.*]
- 藤原マリ子 . (2012). 「ブラジルの歳時記—成立の経緯と特徴」 東聖子・藤原マリ子編 『国際歳時記における比較研究—浮遊する四季のことば』 笠間書院, 386-408.
- 古川富章 . (2023.9). 「下山逸蒼と直原敏平—『レモン帖』 終刊号と『トシヘー』 創刊号」 『日本古書通信』 , 1130, 18.

- ブルデュー, ピエール. (1990). 石井洋二郎訳, 『ディスタンクシオン』 1-2, 藤原書店. [= Bourdieu, P. (1979). *La distinction: critique sociale du jugement*. Éditions de Minuit.]
- ブルーマー, ハーバート. (1991). 後藤将之訳, 『シンボリック相互作用論—バースペクティヴと方法』 勁草書房. [= Blumer H. (1969). *Symbolic interactionism: Perspective and method*. University of California Press.]
- ミード. (1973). 稲葉三千男, 滝沢正樹, 中野収訳, 『精神・自我・社会』 青木書店. [= Mead, G. H. (1934). *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist* (C. W. Morris, Ed.). University of Chicago Press.]
- 山田閨子. (2008). 「望郷の月—スコット沼蘂女」 角川学芸出版編 『女性俳句の出発』 角川学芸出版, 207-218.
- Adachi, K. (1976). *The enemy that never was: A history of the Japanese Canadians*. McClelland and Stewart.
- Antonio, J.-P., Amano, T., & Pearce, J. (2025). Haiku activities of Japanese immigrants in Canada during the internment period: Ryukichi “Shunko” Miyake and the Sandon and Slocan haiku clubs. *Journal of Suzuka University and Suzuka Junior College* 8, 1-20.
- Pearce, J. & Antonio, J.-P. (2020). Haiku in Tashme: The legacy of Sukeeo “Sam” Sameshima. *British Columbia History*, 53 (1), 5-12.

# Deepening Autumn: A Sociological Study of Prewar Japanese Canadian Haiku Communities

Tsuyoshi Amano (Tokoha University)

This study examines the sociological significance of haiku activities among Japanese immigrants in pre-World War II British Columbia, Canada. While previous scholarship has emphasized literary expression or the localization of *kigo* (seasonal keywords), this research repositions haiku as a socio-cultural practice through the theoretical frameworks of Émile Durkheim's "collective conscience," Pierre Bourdieu's "cultural capital," and Antonio Gramsci's "hegemony." By analyzing *ginsha* (haiku groups) formed within industrial settlements—including mill camps, farming communities, and urban commercial districts—alongside the Vancouver-based *Ajiro-kai* and the Japanese-language newspaper *Tairiku Nippo*, this study demonstrates that haiku was far more than a recreational pursuit. It functioned both as a ritual practice fostering communal solidarity and as a mechanism for constructing cultural hierarchies and elite identities within the ethnic community. Furthermore, participation in Japanese literary magazines enabled symbolic affiliation with the homeland and affirmed the cultural refinement of immigrant poets. Ultimately, this study reveals haiku as a dynamic medium through which identity was reconstructed and social order maintained within the prewar Nikkei diaspora.

Keywords: Japanese Canadians, haiku, collective conscience, sociocultural status, cultural refinement